NRI学生小論文コンテスト2012

募集告知から審査、そして表彰まで

募集告知

次の世代に残すもの、そして新たに創り伝えるものとは

2012年のコンテストの概要が決まったのは5月初旬。
5月10日のNRIホームページ上での募集要項発表とともに、
コンテストはスタートしました。以降、今年も多くの皆さんに
コンテストに応募いただこうと、告知活動を展開しました。
チラシやポスターの配布、新聞や雑誌への広告掲載。
全国の高校や大学にも案内を送付しました。

二つの赤い球

隣接した大小の赤い球体が、今年のコンテストのシンボルになっています。今回の論文テーマである、今いる自分たちの社会と、次の世代に創り伝えたい社会、あるいは残していくものと新たに創り出すもの、を象徴しています。

「自分たちの子ども世代」をテーマに含めた意図

一般論を展開するのではなく、応募者自身が自分ごととして社会をとらえ感じることを、文章にしてほしい。そのため、自分たちにより切実となる「自分たちの子ども世代」という言葉を選んで、テーマを設定しました。

ペア応募のねらい

2011年のコンテストから、ペア応募を受けつけています。互いに話し合うことが、考えをより深めることにつながるとの考えからです。

全国の学校、書店で……コンテスト応募を呼びかけました

今年も全国でコンテストを告知しました。大学敷地内の掲示板や書店のインフォメーションコーナーにポスターやチラシを掲示するなどして、コンテストをアピールしました。また、NRIグループの社員有志が、出身校にメッセージカードを添えてポスターやチラシを送ったり、実際に母校に足を運んだりしながら、学生たちに応募を呼びかけました（詳しくはP92）

金沢大学 大学会館

南山大学
国際教育センター

愛媛大学 国際連携支援部 国際連携課

福岡大学
福岡金文堂（書店） 入口

法政大学 市ヶ谷キャンパス
食堂「フォレストガーデン」入口

北海道大学
札幌キャンパス
中央食堂階段の掲示板

審査

すべての論文に目を通し厳密な基準で評価します

入賞論文を決定するまでには、予備審査、1次審査、2次審査という3つのステップがあります。事務局での予備審査の後、一定の基準をクリアした論文がNRIグループの社員による1次審査に進みます。1次審査で評価が高かった23点の論文が2次審査に進み、2次審査会において入賞論文が確定します。どの審査においても、規定の評価基準に基づいてそれぞれの応募作品を複数の者が評価し、評価の偏りを抑えるようにしています。

募集 2012年6月1日～9月18日 コンテストの告知活動を通じて応募を呼びかけ

予備審査 9月19日～10月25日 事務局で応募論文が審査基準を満たしているか確認

1次審査 10月26日～11月13日 NRIグループの社員が論文を評価し23点の論文が2次審査へ

2次審査 11月16日～11月26日 9名の2次審査委員が論文を評価

2次審査会 11月28日 2次審査委員が集まり入賞論文を選出

入賞論文発表 11月30日 NRIホームページで発表

論文審査の評価基準

テーマと論点の整合性

考察力・分析力
- 論点やテーマ、着眼点の独自性・斬新さ
- 具体例、数値を使用するなど論点のわかりやすさ
- 論点への考察の深さ

提案力
- 提案や解決策の独自性・実現性
- 提案や解決策のスケールの雄大さ、視野の広さ
- 提案内容、主張の明快さ

文章力
- 論文構成のわかりやすさ、文法の正しさ
- 誤字・脱字の少なさ

評価基準以外のプラスアルファ

上記に該当しない点を評価

評価基準以外の尺度で高く評価された論文は、この項目で加点されます。例えば、執筆者の熱い想いや、独自の調査・取材などが評価されます。

論文の要約も審査のポイント

このコンテストでは、応募論文に対し、大学生・留学生は400字程度、高校生は200字程度の要約を課しています。この要約も、審査項目の一つ。2次審査の対象となった論文については、NRIグループの社員が論文の要約を読んで投票を行います。

論文要約投票の評価基準
- 論点やテーマ、着眼点の独自性
- 提案や解決策のスケールの雄大さ
- 視野の広さ

上記の視点から、NRIグループの社員が優れていると考える1作品に投票しました。

論文要約投票の感想

「本当にそう思っているのだろうな、と思われた」

「本質的な部分に焦点を当てていると思えた」

「要約に章立ての概略を記載し、ゴールに向けてのスキームを明確化している点を評価した」

「本文を読んでみたいと思った」

2次審査会

審査委員9名が3時間にわたって議論を展開

9名の審査委員が3時間にわたる議論を重ね、
絞り込まれた23の論文から、
11の入賞作品を決定しました。

審査委員長
椎野 孝雄 理事

若い世代が書いた多くの論文を読んで、明るい希望を持つことができました。高校生の部では、楽しく夢のあるテーマが多く、留学生の部では「こういう考えの人がいるなら近隣諸国との問題もいずれ解決するに違いない」と期待を持ちました。大学生の論文には、未来に向けた挑戦が数多く書かれていました。日本の閉塞感を打ち破るきっかけとなる、将来の社会への希望が感じられる提案ばかりでした。

特別審査委員
池上 彰 さん ジャーナリスト・東京工業大学教授

今年のテーマは、筆者が自ら何をしたいかを問うものでした。そのため自分の経験、可能性を自分の言葉で語っている、バラエティに富んだ論文が多かったと思います。また参考文献にウィキペディアを挙げるようなものはなく、書籍や公的機関が提供しているデータなどを参考にして思考を深めている作品が多かったのが印象的です。どの論文も読んでいて、大いに楽しむことができました。

特別審査委員
最相 葉月 さん ノンフィクションライター

「自分たちの子ども世代」という具体的な対象を挙げてテーマ設定したことから、若い人たちが身近な問題として真摯に考えてくれたと感じます。教育を取り上げた論文が多かったのは、彼ら自身が、今その現場にいるからでしょう。また「閉塞感」「生きる」などの言葉が散見されたことも印象に残りました。個人の想いが強くて論文らしくないものもありましたが、説得力に富む内容だったと思います。

審査委員

三浦 智康

執行役員
総合企画センター長

審査では、次世代に何を残したいのか、そのために本人は何をするのか、読み取れるかどうかを大切にしました。大学生については、論文としての体裁が整っていることも重視しました。今年も活気ある提案が多かったと思います。

審査委員

淀川 高喜

研究理事

大学生の論文は粒がそろっていて、読み応えがありました。それぞれ具体性もあり扱うテーマも面白かったです。一般論ではなく、自分の実体験を踏まえて、これから何をしようとするのかを提案している作品は高く評価しました。

審査委員

中元 秀明

イノベーション開発部

論文全体が論理的にまとまっていて、参考文献を踏まえたうえでオリジナリティのある提案をしている作品を高く評価しました。本人の経験に基づいて強く思ったことから論を展開している論文には、説得力があります。

審査委員

中野 ひなつ

証券ITソリューション
事業本部
NS事業部

高校生の論文は、自分にできることが提案に盛り込まれ、書き手の人となりも見える生き生きした文章かを、留学生・大学生の論文は、自分なりに考えた独自性ある提案かを観点に審査しました。筆者の想いが伝わってくる論文が多く、読み応えがありました。

審査委員

野村 武司

コーポレート
コミュニケーション部長

今年は、本人の気持ちが強く伝わってくるものや、経験に基づいた具体的な提案を含むものなど、非常に読み応えのある論文が数多くあったと思います。そのような書き手の想いが伝わってくる、心に響く論文を高く評価しました。

審査委員

横山 喜一郎

CSR推進室長

今年は本人の想いが強く感じられる論文が多かった印象があります。読んだ人の心を動かすかどうかも、重要なポイントだと考え評価しました。そうした論文は、より多くの人に読んでいただきたいと思います。

論文発表会

NRI社員を前に 入賞者が提案内容をプレゼン

12月21日、東京駅近くにあるNRI本社に
入賞者が集まり、論文発表会が行われました。
NRI代表取締役社長の嶋本正や審査にかかわったNRI社員、
かつての入賞者を前にして、11の論文が発表されました。

論文発表会は、NRI代表取締役社長の嶋本の挨拶から始まりました。嶋本は、東京スカイツリーや昔の姿に修築された東京駅を例に挙げ、「これからの日本を元気にするには、伝統、創造、情熱の3つが重要になる。今年選ばれた論文には、この3つが感じられた」と入賞論文を高く評価しました。

その後、高校生、大学生、留学生が、順に論文内容を発表しました。入賞者たちは、写真や図を上手に使いながら、論文の内容をわかりやすく説明。なかにはプロのアナウンサーのように上手に解説する入賞者や、ウィットを効かせて笑いを誘いながら場を盛り上げる入賞者の姿もありました。

発表会の後は、会場を移して軽食を取りながら、NRI社員や過去のコンテスト入賞者を交えてグループディスカッションが行われました。

NRI代表取締役社長の嶋本正（左上）と入賞者たち

今年は、高校生、留学生、大学生のグループにNRI社員が加わるかたちで、ディスカッションを行いました。以下は、その様子を伝える抜粋です。

高校生

NRI社員―みんなはどうして応募したのですか？
高校生A―学校にコンテストのポスターが貼ってあったのを見たのがきっかけです。
NRI社員―NRIという会社を知っていましたか？
高校生B―知っていました。
NRI社員―高校生で知っているなんて、すごいね。
NRI社員―プレゼンテーションではパワーポイントを上手に使っていましたが、学校の授業でも使っているのですか？
高校生C―実は、この間習ったばかりです。
高校生D―僕は去年の高校生の優秀賞入賞者だけど、去年はパワーポイントを使えなかった。すごいね。

留学生

NRI社員―日本に来てみて、どんなふうに思いましたか？
留学生A―来日する前の印象と、実際の日本は違っていました。それを中国の人たちに伝えたい、国にとって一番いい付き合い方を考えていきたいと思いました。
NRI社員―留学生の皆さんは、なぜ日本と中国、両方の良いところに目を向けてくれたのですか？
留学生B―もちろん両方の悪いところだけを見てしまう人もいます。でも相手を受け入れることが大事です。そうすれば良いところに気がつきます。
NRI社員―日本のどういうところが好きですか？
留学生C―自然や環境、それからサービスの質が好きです。中国の都市部は急速に発展して姿を変え、故郷を失ったという感じがします。日本には昔の自然が残っています。

大学生

NRI社員―医学部医学科の人が入賞したのは今年が初めてなんですよ。
大学生A―医療の現場は忙しくて、社会に向かって意見や情報を発信するルートもあまりありません。でも社会を動かすには、医療現場と社会の間で問題意識の共有が必要だと思います。
NRI社員―出産もそうですが、今年は教育や子育てというテーマが多かった。子どもがキーになって社会を変えることが多いと改めて思いました。
NRI社員―NRI社員へのアンケートでも、子どもがいるほうが幸せと感じる人が多いと結果が出ているんですよ。
NRI社員―グローバルな視点の論文もいいけど、農産物直売所のように身近なところから社会を変えるアイデアも良かったと思います。
大学生B―直売所というと地域や農業が注目されています。そこに子育てという、一見つながらないものを結びつけると、意外な効果が生まれると気づきました。私も論文を書いてみて、本当に実現したいと強く思いました。
NRI社員―政治経済の専門家を育てようという発想はどこから来たのですか？
大学生C―地理や政治経済は重要なはずなのに、大学受験ではあまり有利にはならないのです。そこを疎かにして良い大学に進んだ人が政治家になることに疑問を感じていました。そこが発想の原点です。

表彰式

入賞者の皆さん、おめでとうございます！

論文発表会の翌22日、品川にあるホテルラフォーレ東京において表彰式が開催されました。入賞者の家族、学校関係者も招き、ともに入賞を喜んでいただきました。

授与式では、NRI取締役会長の藤沼彰久が祝辞を述べた後、入賞者が一人ずつ壇上に登り、藤沼より表彰状と副賞を受け取りました。

その後、審査委員長であるNRI理事の椎野孝雄、特別審査委員であるジャーナリスト・東京工業大学教授の池上彰さん、ノンフィクションライターの最相葉月さんから、一つひとつの論文に対し講評が述べられました。

講評が終わると、立食パーティ形式の祝賀会に移りました。祝賀会は、入賞者と池上さんや最相さん、NRI社員、家族や学校関係者が自由に語り合ったり、記念写真を撮ったりと、終始和やかな雰囲気でした。

かしこまった面持ちで表彰状を受け取る入賞者

審査員たちの温かいコメントに真剣に聞き入る入賞者たち

一つひとつの論文に丁寧にコメントを述べる池上さん、最相さん

大学生の部 大賞
山本 泰弘 さん

今回、スーパーソーシャルハイスクールという、自分が正しいと考えるアイデアを論文として発表し、大賞をいただきました。ありがとうございます。しかし論文が発表されただけでは、社会は変わりません。NRIがこのアイデアを実践するトップランナーとなって、うまくビジネスに活用できるようコンサルティングに生かしていただけたら幸いです。また各地の学校が、このアイデアのエッセンスを取り入れて、実践してくれることを期待しています。

留学生の部 大賞
林 猷琼 さん

大賞をいただいたことは夢のようです。また池上さん、最相さん、NRIの方々とお会いできて、光栄に思います。私が論文を書いた目的は、日本、中国に今生きている子どもたち、そして次の世代の子どもたちに、両国を体験した留学生の声を届けたいと思ったことです。だから、この想いが伝わることを第一に考えて文章にしました。今回大賞をいただいたことをきっかけに、私も日本、中国の未来のために、いろいろな挑戦を続けていきたいと思っています。

高校生の部 大賞
木田 夕菜 さん

小学校の自由研究、中学校の調べ学習など、私が今まで取り組んできたことが実ったのが、今回の論文です。私の故郷・鹿児島でも、緑化した市電の軌道敷が増えていますし、隣の熊本でもこの活動が広がっています。これまで都市部といえば、グレイなコンクリートのイメージがありました。これからは緑の多い都市部になってほしいと思います。今回論文執筆を経験し、改めて環境について深く学びたいという思いを強くしました。

「社会人になったら自分のアイデアを実現できるように頑張りたい」

論文についての感想を聞く入賞者

論文に書ききれなかった想いも存分に語り合う入賞者

最相さんからのコメントは気になるもの

会長の藤沼と歓談する留学生の入賞者

「小学生の頃から興味のあるテーマだったんだね」

コンテストへの応募動機

次の社会を担う大人としての自覚と日頃の疑問が、発端

大学生　留学生

日頃、子どもたちとかかわる中で感じる、**大人としての自分の責任について**、自分の考えを見つめ直し、多くの人と意見を交換したいと考えたからです。（大学３年）

分野に縛られず、自分の思いのたけを**存分に主張できる場**を探していました。（大学３年）

日頃から感じている疑問、違和感、使命感、**社会への訴えなどを体系化する**良い機会だと考えました。また、私自身を見つめ直し、人格・アイデア・知見を洗練する機会にもなります。（修士２年）

大学図書館でコンテストを知りました。**私が望む社会の姿を明らか**にしたい、また納得のいく論文を書くためにさまざまな本を読むきっかけにしたいと思いました。（大学２年）

私が日頃感じていることを公の場で発表し、日本という社会の**暮らしにくさや歪んでいるところ**を指摘して、その変革に貢献したいと思ったから。（大学４年）

祖父から**学生生活最後の挑戦**にどうかと勧められ、テーマに関して多少なりとも関心やアイデアがあったので、よい機会だと考えた。（大学４年）

大学４年間の総決算として、自分が学んだことや感じていることを発信したいと考えたから。（大学４年）

日本の将来を考え、また、**自分の専門以外の分野に触れる**よい機会だと思った。（大学４年）

中国の留学生として、尖閣諸島をめぐる**日本と中国の問題を平和的に解決**するにはどうすればよいのかと考えていたところ、ちょうど学校の図書館でコンテストのチラシを見て、論文を書こうと思いました。（大学２年、留学生・中国）

私は、次の世代に何かを残すことが、人間を含むすべての生き物のあるべき姿であり、それが生きる意味だと考えています。**テーマを見て、ぜひ**論文を書きたいと思いました。（大学４年）

このコンテストは、日本が元気を回復するのに役立ち、かつ**同胞の夢の実現に私が貢献できる**貴重な一歩だと思い応募にチャレンジすることにしました。（専修学校専門課程４年、留学生・モンゴル）

この**テーマについて考えていた**からです。次の進路はどのようになるか、社会で自分に何ができるのかという思いがあり、それを何かに書いて知らせたいと思っていました。（日本語学校２年、留学生・ベトナム）

今年、大学生になって、自分が**大人であることを自覚**しはじめ、これから先、私が自分の子ども世代のためにどのように社会を創り上げたらいいのか、考える必要があると思いました。（大学１年）

今回のテーマは、私が**日常生活の中で模索**していたこととても似ていました。私の考えを人に読んでもらい、評価してほしいと思いました。（大学３年、留学生・韓国）

コンテストへの応募動機

夏休みの課題として、また、将来への不安感から

高校生

自分の子供ができた時に、このままでは**今よりも不安の多い社会になっている**と思うので、自分たち世代が社会を担うためにするべきことを考える良い機会になると思ったから。（高校1年）

自分が**いつも不思議に思っていること**を聞いてもらえるいい機会だと思ったから。（高校2年）

自分自身が悩み続けていたことと向き合う機会になると思いました。**言葉には伝える大きな力がある**と思っています。その力を借りて、私が悩みながら出した答えを皆さんに知ってもらえればうれしいと思い応募しました。（高校1年）

昨年も応募したので、**今年も挑戦**してみようと思いました。（高校2年）

自分がぼんやりと考えていたことを**明確にしたかった**から。（高校3年）

今は、昔よりとても物騒だし、いじめなど、マイナスなニュースが多いと思います。このままでは、**大変な世の中**になっていきそうで**とても心配**しています。そこで、私の考えを伝えたいと思いました。（高校2年）

要項を見て、これならば**自分にもできる**かもしれないと思った。（高校1年）

私は自分が興味ある社会科学系の分野で、**自分の意見を練って**発信する力を磨きたいと思っていました。NRIのコンテストでは、そのような力を試せると同時に、自分が日頃抱いている意見や考え方を表明する一つの機会になると思いました。（高校1年）

本コンテストに応募したのは、私自身、**将来に対する不安**があるからです。将来の社会の安定のためにはどうしたら良いのかを一度深く考察し、まとめたいと考えました。（高校2年）

野村総合研究所という名前を聞いたことがあり、また過去の開催実績をみて**興味を持った**から。（高校1年）

夏休みの選択課題の一つでしたが、今の**自分が未来の社会のために**何ができるのかを見つめ直す良いきっかけになると思ったからです。（高校1年）

正直、**今の日本に誇りを持てていなかった**ので、日本を活性化し将来の子供たちにはもっと誇りを持ってほしいと思ったから。（高校3年）

将来、私は政治家になるという志を持っており、夏期休暇を利用して小論文を執筆することを通じ、自身の思想や姿勢、将来設計を確立したいと考えていた。また、東日本大震災以降の政治や報道、それらに煽動される社会情勢に強い危機感を抱いており、学生という将来世代の立場から**警鐘を鳴らす機会を得たい**と切望していた。（高校2年）

最初は学校の宿題として出されたから応募したが、調べていくうちに**最近の世界や日本の事情を知ることができ**てためになったのでこれからもこのような小論文コンテストがあったら応募したい。（高校3年）

NRI社員による審査の感想

論文の社内審査を行った NRI社員のコメント

大学生

どの論文も「あるべき社会」への考察が大変素晴らしく、甲乙を付けることが非常に困難だった。（システムエンジニア／男性）

お世辞抜きで、今年の論文はいずれもハイレベルだったと思います。驚きの一言です。（コンサルタント／男性）

（論文をまとめることによる）このような思考の機会が、当社のイベントによって生み出されていることは、すばらしいことだと思う。高評価の論文が、多くの人の目にとまるよう、期待している。（コンサルタント／女性）

今の大学生や高校生が社会に対して何をどの程度考えているのかを知りたいと思い小論文審査に参加しました。多くの筆者が、自分なりの着眼点や問題意識を持ち、具体的に活動していたり解決策を考えていたりすることが感じられ、刺激を受けました。（システムエンジニア／男性）

よくできた論文とそうでない論文の差が大きい印象がある。また、よくできているものは、正直、私を含め周囲の当社社員の考えよりもしっかりしているのではないかと思った。（スタッフ／男性）

留学生

どの論文も着眼点に個性があり、とても面白かったです。ただ、やはりまだ考察や分析が不足しているため、説得力の弱い論文もあると感じました。（マネージャー／男性）

日本の学生に比べて「意見が純粋である」と感じました。また、留学生は日本を客観的に見ているので、日本人としてハッと気づかされることがたくさんありました。読んでいて私自身の勉強になりました。（コンサルタント／男性）

全体的にみなさんよく考えていらっしゃって甲乙つけがたい論文でした。（システムエンジニア／女性）

学生たちの感性に触れ、新しい視点からの考えは、とても楽しいものでした。来年度もまた審査に参加したいと思いました。（システムエンジニア／男性）

高校生

素晴らしい論文に出合うことができた。読んでいて、ちょっと楽しくなった。（システムエンジニア／男性）

初めて高校生の小論文を審査したが非常によい経験となった。全国の高校生が考えている未来を知ることができ、20代の自身が社会にどう貢献するか改めて考える機会になった。（システムエンジニア／男性）

若い世代の方々が「これからの日本はどうあるべきか？」「自分は何をすべきか？」ということを真剣に考えているのだと実感しました。「社会への提案」という観点よりも「自分として特にやりたいことは何か」という観点が重視されている今回のテーマは、高校生の小論文コンテストとして、とてもよかったと思います。（スタッフ／男性）

学校や机上での学習だけでなくインターンやボランティアなどの課外活動を通じて、社会と深く触れ合い、さまざまな経験をしている学生ほど、深い考察や熱意のある提案ができているように感じました。これからも自分なりに考えて行動し、将来の夢や理想の未来の実現に向けてまっすぐに進んで欲しいと思います。（システムエンジニア／男性）

論文なのに、「～と思う」といった主観的な記述の多い作品が目立った。その半面、データや事例を挙げて論証しようとする迫力ある文章から、個人的な想いが伝わってくるものもあった。（コンサルタント／男性）

参加者の中での差の大きさを感じました。ネットで得た情報やなんとなく考えた情報ではなく、実際に経験することや実感することが大切なのだと改めて感じました。自分自身もいろいろと経験をして、社会について真剣に考えなくてはと考えさせられました。（スタッフ／女性）

社会平和や平等に対する強い思いを持ち、それを論じている方が多かったことに驚きました。論文らしくない作文のような文章が多いと感じましたが、強い思いが伝わってきました。（システムエンジニア／男性）

NRI社員のコンテスト告知活動

皆さんの高校・大学を NRI社内応援団が訪問

コンテストの告知活動は
NRIグループの社員有志が地道に行っています。
母校やゆかりのある学校に、
ポスターやチラシと一緒に
メッセージカードを送ったり、
実際に訪問したりしながら
学生に応募を呼びかけました。

宇都宮大学

幸若 栄毅（産業システム事業四部）

母校の教授と学生にコンテストを説明

母校の工学部と農学部を訪問し、「NRI学生小論文コンテスト2012」に関して教授と学生に説明してきました。コンテストについては、プロジェクターを用いた会社説明の中で触れ、募集をお願いしました。夏休み期間中でもあったので、集まった学生は8名程度でしたが、NRIという会社に興味のある学生らと積極的な質疑応答のやりとりができました。

学生たちに、NRIとコンテストを説明

広島県立安古市高等学校

小室 一彦（STAR事業管理部）

今年も学生たちに応募を呼びかけ

母校の2年生の生徒全員（317名）に、キャリア教育の一単元「未来のシナリオづくり」の中で、コンテストへの応募を呼びかけました。社内応援団としての訪問は、今年が4回目になります。社会人生活やNRIの事業について説明を行い、応募要項を案内しました。今年は先生方から「2年生を対象に小論文を書かせて応募させます」と心強い回答をいただき、うれしく思っています。

体育館で2年生にコンテストを紹介

宮崎日本大学高等学校

若友 千穂

（コンサルティング事業本部グローバル人材開発室）

クラスでコンテストを紹介

先生方には「NRI学生小論文コンテストに応募することは、東京の風を感じることができ、生徒にとってたいへん刺激になる」と喜んでいただきました。また「理系大学志望の学生たちがNRIに対して憧れを抱いている」というお話を先生からうかがうこともでき、私自身にとっても励みになりました。

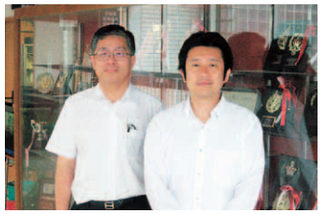
教室で生徒を前にコンテストをアピール

宮城県仙台第三高等学校

土門 和幸（保険システム五部）

昨年の大賞受賞者在籍校を訪問

2011年コンテストで大賞受賞者の出た母校を訪問し、教頭先生に会ってきました。教頭先生からは、「日本の金融基盤を支える会社に卒業生が在籍していることを誇りに思う。今年も夏休みの宿題の中から小論文コンテストの趣旨に合うものがあればピックアップして応募させていただく」旨のお申し出をいただきました。



今年のコンテスト応募をお願いしました。
左が教頭先生

教員から見た「NRI学生小論文コンテスト」

神奈川県立中央農業高等学校
（今年の優秀賞受賞者の在籍校）

髙橋 晋太郎 教諭

当校は農業高校なので、生徒が小論文を書く機会はなかなかありません。一方、生徒たちのなかには、所属する部活動のなかで意欲的に自分の研究課題に取り組んでいる者がいます。自分の取り組みや成果を文章にしてまとめ、人から評価してもらうのはとても大切なことだと思います。「NRI学生小論文コンテスト」は、その貴重な機会になると改めて思いました。来年から、生徒に呼びかけて応募を促そうと思っています。

頌栄女子学院高等学校
（今年の優秀賞受賞者の在籍校）

田中 克己 教諭

「NRI学生小論文コンテスト」は、当校の生徒が今回入賞したことで初めて知りました。表彰式に参加させていただきましたが、NRIの方々や、特別審査委員の池上さん、最相さんは応募論文一つひとつをきめ細かく読んでくださっており、審査のプロセスがたいへん丁寧であることがよくわかりました。このコンテストは、生徒にとって文章を書く良い機会になると思います。来年のコンテストには生徒に応募させたいと考えています。

おわりに

今回のコンテストには、
過去最多となる1,390名の学生の皆さんから、ご応募をいただきました。
今回の応募作の特徴として、
「これからすべきこと」に思い至った経緯や熱意は伝わるものの
体験記あるいは感想文になってしまっている作品が多く見受けられました。
本書で紹介している評価基準や審査委員のコメントなどをヒントに
工夫をすれば、もっと良い小論文が書けるようになると思います。
参考にしてみてください。

また、過去最多の応募をいただけたのは、
募集の告知にご協力くださった、多くの学校や先生方のおかげです。
この場を借りて、心より御礼申し上げます。
このコンテストが、学生の皆さん、ひいては
日本や世界のよりよい未来につながるところがあれば幸いです。

2013年2月

「NRI学生小論文コンテスト2012」事務局

メディアでの掲載

NRI学生小論文コンテストは、毎年、さまざまなメディアに取り上げられています。
その一部を、紹介いたします。

「上毛新聞」2012年12月20日付朝刊

「オルタナS」
http://alternas.jp/

「月刊留学生」2013年1月号　（注）写真は2011年の入賞者

「高校生新聞」2013年3月1日号（第204号）

NRI学生小論文コンテスト2012
日本から未来を提案しよう！

野村総合研究所　コーポレートコミュニケーション部　CSR推進室
発行：2013年3月
Copyright©2013 Nomura Research Institute, Ltd. All Rights Reserved.

株式会社 野村総合研究所

〒100-0005 東京都千代田区丸の内1-6-5 丸の内北口ビル
Tel.03-5533-2111
http://www.nri.co.jp